



1985年(昭和60年)
11月号(No. 485)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部150円

目次

祖母山とウェストン 安江安宣	……(1)
自然保護“標語”募集	……(1)
海外の山	……(2)
「盛況のブータン・ヒマラヤ」	
「豪州の登山近況(上)」	
武州雲取小屋のできた頃(上)	
柿原謙一	……(4)
創立80周年記念行事(富山)	……(5)
東西南北	……(6)
「丹水会夜話」「ビールパーティの夜」	
「八幡平への旅」「花と氷河の旅」	
報告	……(8)
「山の気象と気象学(8)」	
「秋のかぬか平例会」「姫夷お月見会」	
80周年第二次募金応募者ご芳名	……(9)
図書紹介	……(9)
住所・住居表示変更	……(9)
会務報告・ルーム日誌・会員異動	……(10)~(11)
お知らせ	……(11)
「忘年会」他	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

お知らせ電話
234六六五九

祖母山とウェストン

……個人史の一側面……

安江安宣

ウェストンがまだ日本アルプスに入るまえの一八九〇年(明治二十三年)十一月六日、祖母山一七五七米に宮崎県側から登山していることは本誌三三七、三三八、三三九、三九三号にたびたび報ぜられているので、その経緯についてはすべてふれないでおく。

筆者はたまたまこの数年のあいだに三回、一九八二年、一九八四年にわたり祖母山麓の生物調査におもむく機会があったので、そのつど宮崎県西臼杵郡高千穂町五ヶ所高原の三秀台にそびえるウェストン碑(一九六六年十一月建立)をおとずれて一服、祖母山や阿蘇五山の雄大な絶景をながめながら九十年まえにこの地をおとずれたウェストンを偲んだものである。

ところでウェストンに関連する記念碑は有名な上高地のほかに、あながい世間には知られていないが、信州飯田市郊外時又の天龍川畔の舟着場にもある(一九六五年五月建立)。これはウェストンが一八九一年(明治二十四年)八月時又港から天龍川下りのコースを浜松に出ている事実にもとづいて

いるが、くわしくは今村良夫・今村真直著「天龍峡、歴史と人情(一九七九年)」を参照されたい。

筆者は一九八一年伊那谷の生物調査に出張のおり、地元から出している宣伝をかねた観光地図にのっていたので気がついた次第。国土地理院の地形図だけにたよると思わぬ見落しを生ずるひとつの例だろう。

五ヶ所高原三秀台に建つウェストン碑にはウェストンのレリーフのほかに、祖母山へ彼が登山した年月日の証明となった土地の名望家矢津田鷹太郎の日記がはめこまれている。本誌三三八号、三三九号に発表されているが、短い文章なので再出する。

『明治二十三年十一月六日晴
天 英人シヨン フランドラ
ン君及び神戸在留同国人シ
ン エストン氏同道ニテ祖母
山登山往復共立寄ラル 河内
泊ノ由也』

この記念碑を前にしてまず考えたの、(一)神戸に住んでいたウェストンが飛騨山脈などへ登るまえに、はるばる海をわたって九州も片田舎にある祖母山を登山の対象としてえらんだ心境、(二)同行者シヨン フランドランなる人物の素姓とウェストンとの関係、(三)なぜ矢津田家に宿をとらず、河内泊りとなったのだろうか等々の諸点で

自然保護“標語”募集

毎月の山(会報)誌上に約三年間にわたって「山をきれいにゴミは持ち帰らう」という自然保護の標語が凸版で載っているのを、お気付きの会員もおられると思う。

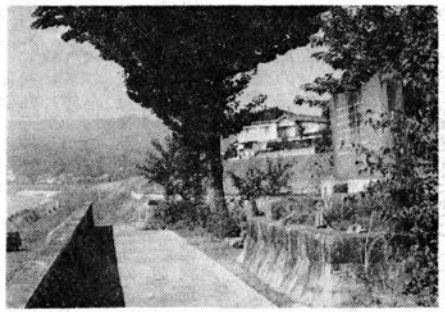
この標語は佐々前会長に書いていただいた貴重なものだが、古典的ともいえる偉大な標語とは別に自然保護への会員の関心の高まりに応じて、新鮮な自然保護に対する標語を会員募集することになった。採用分は、会報誌上で紹介するほか、ささやかな記念品を用意している。

標語は、かならずしも春夏秋冬の季節にこだわらないが、季節感のある標語はとくに歓迎したい。毎月の会報を立派な自然保護標語で飾り、自然保護への関心を一層高める一助としたい。多数の会員の応募をお待ちしている。

自然保護委員会

ついで、不滅の記録となった日本アルプスの探検登山に関する事項以外は一部山岳史家たちの努力にもかかわらず、未だに謎にまつまれている。この間の状況はかつて黒田孝雄氏(山岳)二十八巻三号)が力作「ウェストンの杖の跡」のなかで嘆かれていたが、それから五十年後の今日でもあまり変わっていない。

たまたま近着の本誌四七九号をみると、島田巽氏がウェストンのわが国への初来日が一八八八年(明治二十一年)四月一日神戸着という決定的事実を公表したのはウェストン研究の個人史としては画期的なことといえる。ウェスト



第1図 飯田市時又の天竜川畔に立つウェストン記念碑(1981 安江写す)

史一九五九年)、福岡(神奈川
県史一九八三年)の計四カ所が
あげられている。

日本聖公会逗子聖ペテロ教会
垣内茂師の考証によれば英国聖
公会聖職名鑑の古い記録を検索
してウェストンは一八八八年
(明治二十一年)熊本に着任し
ていることを確認した。熊本の
地名はこれより先、英王立地理
学誌にのったウェストンの追悼
記事にもあるが、短かい文なの
で根拠となる出典がわからなか
った。

ウェストンの任地が熊本とな
ると、つぎに問題となるのは熊本
市内のどこに教会の牧師をしてい
たのである。彼の出身経歴から
考えると当然C・M・S系の日本
聖公会を思いつく。ちよつと山の
話からずれるので恐縮だが、日本
聖公会はウェストン来朝の前年に
あたる一八八七年(明治二十年)

二月、それまでわが国内で宣教活
動をしてきた米国聖公会、英国聖
公会教会伝道協会C・M・S、
英国聖公会福音宣布協会S・P・
Gの三者が大阪市川口町居留地に
あつた大阪三一神学校で連合總會
を開催、協議した結果、創立され
た因縁がある(日本聖公会史一九
一〇年、日本聖公会百年史一九五
九年)。

そこで日本聖公会熊本三一教会
司祭戸修一師におねがいし明治
二十一年ごろ、ウェストンが熊本

海外の山

盛況のブータン・ヒマラヤ

二年前ようやく登山が解禁されたブータン・ヒ
マラヤが、あつという間に大した盛況ぶりであ
る。それも日本隊の活躍が目立つ。

ブータンの山と言え一九三七年英国隊に、七
〇年、インド・ブータン合同登山隊に登られたチ
ヨモラリ(七二九三呎)がよく知られているが、
このほかに登頂されているのは、やはりインド・
ブータン合同隊によるカングリI峰(六九一九
呎)、同III峰(五八八九呎)など五、六千呎峰の
ごく一部だけである。

それだけに各国の登山家から注目され、登山許
可取得のさまざまなアプローチがなされたわけだ
が、一九八二年秋、ブータン政府は特望の登山解
禁を発表した。翌八三年、その第一号として日本
の女子登山クラブ隊とオーストリア隊がチヨモラ
リに近いジチュダケ(七〇〇三呎)に挑戦、オー
ストリア隊は南西稜から登頂、女子登山クラブ隊
は東稜からの登頂を断念し、かわりにセプチュ
カン(五二〇〇呎)に登った。東稜からの登頂は
翌八四年、日本ヒマラヤ協会隊が果たすことにな
る。

八四年にはこのほか、東京都勤労者山岳連盟隊
が、北部のナムシラ(六五〇〇呎)に挑戦、登頂
と伝えられたが、これは近くの無名峰だったらし
い。この秋、同じナムシラに向かった千葉大隊が
「谷一つへだてた所」に、ナムシラを確認したと

伝えてきている。目的の山をさがすがひと苦勞
という地域なのである。

注目のブータンの最高峰、ガンケール・プンズ
ム(七五四一呎)には今秋、日本ヒマラヤ協会隊
とアメリカ隊が挑んだ。七三年、インド・ブータ
ン合同隊が挑戦して断念したこの山の南西は、鋭
い雪稜とハンダの壁が続く難峰で、中央稜ルート
をとったヒマラヤ協会隊は結局、六八〇〇呎地点
で断念した。

もう一つの七千呎峰、今年になって開放された
マサカン(七二〇〇呎)の方は京大隊が登頂を果
たした。このほか、スキー登山隊やトレッキング
隊などブータン入りする日本人は、急速にふえて
いる。

しかし、ブータン・ヒマラヤと聞いて私などが
すぐ思い浮かべるのは、何と言ってもクーラ・カ
ンリ(七五四四呎)である。

ガンケール・プンズムより三呎だけ高いこのブ
ータン・ヒマラヤの最高峰が行政的にはブータン
国内でなく、中国チベット自治区に属することが
わかったのは、一九五八年、中尾佐助氏が現地を
訪れた時とされている。しかし、それ以後に外国
で発行されたブータンの地図の中にも、クーラ・
カンリをブータン領内に位置させているものがし
ばしばあり、私自身最近まで南面の一部はブータ
ンにひっかかっているものと思ひこんでいた。

そうではなく、この山の頂はそっくりチベット
に位置するのである。山としてはブータン・ヒマ
ラヤに属し、その主峰と言ってもいい存在だが、
登山許可取得の交渉はすべて中国側としなければ
ならない。そして、その許可を神戸大隊が取得、
来春本隊派遣に向けて準備を進めている。

食堂テントのテーブルでスूपからデザートま
でのコースを毎食楽しめ、森林帯で虎の足跡にお
どろくこともあるというブータンのキャラバン。

で行なった宣教活動の様子を問いあわせたところ、意外にも今日、ウェストンの在職記録はまったく残っていないことがわかった。念のため同教会の教会史編集委員黒木誠一氏がわざわざ在熊本の他派基督教団についても当ってみられたが、ウェストン師の名はついででなかったという。

また日本聖公会神学院岩田健夫主事の好意により「日本聖公会九州教区史」(一九八〇年)も閲覧することができたが、ウェストンの名は見あたらなかった。しかし幸いにも祖母山登山のときウェストンの同行者だったブランドラム師 Rev. John Babbs Brandram, 1869-1900. は当時熊本に定住していた英国聖公会日本伝道教区司祭であることがわかった。彼は一八八四年(明治十七年)長崎に到着し、同市新大工町に講義所を開いているから、ウェストンより来日は四年も早いことになる(立教大研究報告二十四号・一九六八年)。

前記島田氏の記事によるとウェストン乗船のロンバードイ号は香港経由で長崎に寄港一泊している。ケンブリッジ大学を卒業してまもない、ばりばりのエリートだった彼がおなじC・M・S系ミッションの先輩ブランドラム師とこのとき対面し日本における布教について業務連絡をしていた可能性も大いに考えられる。

ウェストンの三番目の著書「珍

奇の国、日本の徒歩旅行者」A Waterer in unfamiliar Japan, 1925. の第八章 九州をみると、熊本、阿蘇山、祖母山、由布岳、霧島山などの風物をくわしく紹介しており、その書きぶりは土地に居住したものでなければ気がつかないような細かい記述にみちている。

『阿蘇山の東には九州第一のピーク祖母山がそびえ……その山麓には Gokurakusho という小さな村がある。いまから何年かまえになるが、筆者とひとりの友人とはヨーロッパ人としては最初にこの村奥に屹立する祖母山を探検した。』

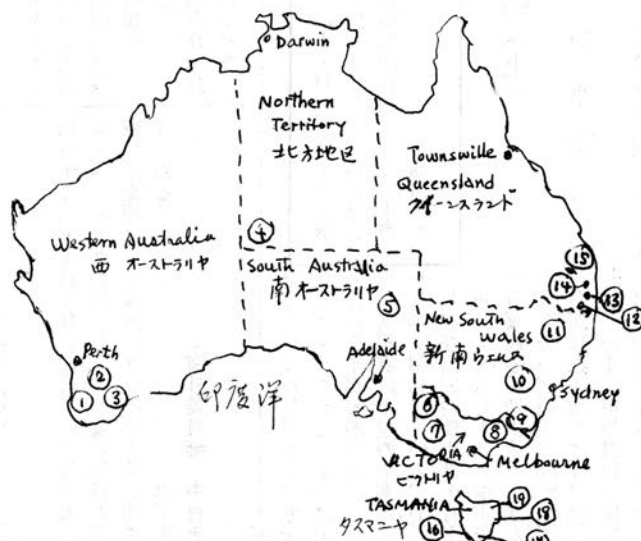
なかには熊本県の五家荘と高千穂町の五か所をとり違えている誤記もみられるが、右文中のひとりの友人とはまさしく熊本の宣教師ブランドラム師を指すものだろう。ウェストンはまた祖母山を九州の最高峰としているが、陸地測量部の事業が進行中だった当時にあつては祖母山が第一とされていたので、ウェストンの誤りではない。たとえば明治二十七年五月発行の地学雑誌二八八頁をみると『近頃地質調査所に於て測定したる所によれば豊後日向の界なる祖母山は一八八〇米……祖母山を以て最高と見做して宜しからん』とある。山の標高は原文のまま。もうひとつ明治時代の在留外人必携の案内書チェンバレン・メー

チベット側からは、そうもいえないが、成果が案しみである。

(江本嘉伸)

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| (11) Willgabrup | (111) Warrumbungles |
| (12) Sterling ranges | (112) Mt. Norman |
| (13) Ponongorups | (113) Mt. Barron |
| (14) ryers Rock | (114) Frog Butress |
| (15) Finders ranges | (115) Glasshouse mountains |
| (16) Arapiles | (116) Frenchman's Cap |
| (17) Grampians | (117) Mt. Wellington |
| (18) Mt. Buffalo | (118) Coles bau |
| (19) Boonoomba | (119) ben Lomond |
| (100) Blue Mountains | |

A 図
登攀地
Climbing areas in Australia



豪州の登山近況 (上)

等級表の設定まで

カンガルー、砂漠、そして長い海岸線のあるオーストラリアで今日、最も盛んなスポーツは岩登りとアルピニズムの登山である。もともとこのスポーツは、そう古くからあるわけではなく、特に一九六〇年に英国人と豪州人数名が(A図の10)シドニーの西にあるブルー・マウンテンで行なったロック・クライミングがこ

の新しいスポーツの「はしり」といわれている。この二人の豪州人とは大学教授のブライデン・アレクサンダーと「偏屈者」のジョン・ユバンク氏であり、この時のルートは現在でもそのまま残っている。彼等の装備はテニス靴に、使い古した麻のロープに古い金具類であったため、世界の何のルートにも劣らないくらい困難な登山となった。その後ビクトリア地域(A図の6と7)をひらき、六〇

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

海外の山

三年（明治二十六年）に横浜で発行された「日本全国教会便覧」という小冊子があり日本聖公会の教会はこの地方にかぎって抽出してみると熊本市、延岡町、高千穂村大字上野村とあるのに気がついた。熊本、延岡のような市街地ならばともかく、現在でも僻遠の地に变りない上野村に単なる講義所でなく、れっきとした正式の聖公会教会が設置されているのは全くの驚きであつた。あいにく番地の記入がないがウエストンとブランドラム両師が祖母登山のあと泊つた

阿蘇、高森、高千穂をへて九州東岸の大部分、延岡へも出張布教をおこなっており、現延岡聖ステパノ教会にのこる資料でもこの事実が追記 ウェストンについてはまだ不審な点が多いけれどもある。たとえば代表的なわが国人名辞典である岩波西洋人名辞典増補版、一九八二年刊をみるとウェストンの神戸在留時代の教会として

裏付けされた。したがって祖母山麓の五か所、河内などは彼の布教旅行の道筋にあたるわけである。

ては聖アンドルーズ教会の牧師となっている。しかし明治初年からの神戸におけるキリスト教会の歴史をしらべて

当然土地有数の名望家矢津田鷹太郎との接触もあったであろう。矢津田日記においてフランドラン君とエストン氏と呼称を区別して使っているのはこの間の親しさの程度を如実にあらわしている。

みると、上記の教会乃至聖アンドレ教会と名づけるものは全く存在しなかったというおかしな事実がわかった。手塚竜磨氏（一九六四年）はウエストンの神戸における勤務先を在神戸英国領事館付牧師としている。いずれにしてもウエストンの神戸、横浜時代について

たまたま国会図書館には一八九

こうして登山や登攀が青年層に流行し始めると、年令層は益々低くなり、学生達は少しでも困難なルートへと挑戦した。一九七〇年にはアメリカや英国、欧州から多数が来豪し、鋭い岩場に登り、若い豪州人を刺激した。一方、豪州人達は元々フリー・クライミングで始まった彼等の登攀技術をヨセミテやその他のロック・クライミングの本場で磨き自信をつけてきた。クリーンな登攀を自負している彼等には、ただし、危険な岩場でのチョックの使用は許されている。

豪州人の山登りは明らかに、ロック・クライミングと従来のアルピニズムの山登りの二つに区別されている。前者はアメリカ、英国、欧州へ。後者はニュージーランドで経験をつみ、欧州へ、ヒマラヤへ、或いはアンデスへと遠征する。

このようにして急速に進んできた豪州の登山技術に対し別表B図のようなUIAAのIX+までに

柿原謙一

本誌八月号の「成瀬君の旧蔵書から」にJ・D・フォーブス著として *A physician's holiday* について記しましたが、同書はジョン・フォーブス著で、氷河学者とは別の同時代人でした。小野幸氏の示唆により訂正いたします。

(島田生)

戦前の武州雲取小屋は、戦中と戦後に一階と二階建てに新築拡張され、雲取山荘と改称もされたが、この管理人新井信太郎（会員）さんが、ちかく創業六十年となる筈だ、正確な設立年代を知りたい、と言われた。

六十年ちかくもたつと、史料散

六十年ちかくもたつと、史料散

<u>U1/v1</u>	<u>U51</u>	<u>L</u>	<u>R55</u>
V1	5.9	v+	17
	5.10a	6a	18
V1+	5.10b	6a+	19
V1+	5.10c	6b	20
	5.10d		
V11		6b+	21
V11+	5.11a	6c	22
V11+	5.11b	6c+	23
V11-	5.11c		
V11	5.11d	7a	24
V11+	5.12a	7a+	25
1A-	5.12b	7b	26
	5.12c	7b+	27
		7c	28
1X	5.12d		
1A+	5.13a	7c+	29
1A-	5.13b	8a	

相当する二九等級を独自に設定した等級表をション・ユーバンクが作った。この表の等級の簡單明瞭さは豪州に來る多數のクライマー達の間では好評である。（以下次号）

(海外委員会 中村テル)

・海外の山

逸して往時茫漠だが、地元関係者のご協力もえて、幸いにも建設当
時の様子がわかった。

武州雲取小屋の工事は、一九二八年（昭和三）の六、七月であり、登山者の使用は七月下旬かおそくても八月上旬と推定できる。

針葉樹会員増山清太郎さん所蔵の
五万分一図幅「三峰」(昭和四年
要部修正測図)には、雲取小屋
(いわゆる甲州雲取小屋)と武州
雲取小屋が記載されており、貴重
な史料となった。

創立80周年記念行事(富山)

(富山県中新川郡上市町
北アルプス文化センターにて)

日本山岳会創立80周年記念事業(富山支部、石川支部共催)では、去る九月二十八日、二十九日の両日にわたり富山県上市町北アルプス文化センターにおいて講師に西堀栄三郎氏を迎え「山に想う」という演題で講演、終って富山県岳連隊による「ナンガバルバート登頂記録映画『白き魔の山』」を上映、会員、非会員三百余名が集った。

続いて、初岳の登山基地馬場島に会場を移し「家族の森」で晩餐会を催し盛会裡に行事の大半を終えた。明日の自由山行は「中山」を予定していたが、生憎の降雨で中止、残念ながらも自然の力に



創立80周年記念晩餐会(富山)で挨拶する今西会長(撮影/石坂久忠)

は勝てず馬場島をあとにしたのである。

西堀さんの講演は、聴く者をして感銘を与えた。京都に生れ柔かい山々に接しながら、愛する憶いを抱かせる自然、年を経ても変わるところのない自然を語ることから始まる。虫が啼き、同じ所にまた同じ花が咲く自然とは、いったいどうなっているのだろうか、と不思議に思ったこと。そこには氏の知らない自然が生きていた。こうして氏の心にはサイエンスをやるという思いが湧いた。そして自然から知識を得ようという思いもした。先がどうなっているのかとの探求心は対照物が遠くにあっても、それに向かって進む気を起こし、白い雪や道松の緑を見ても探求心が出たし、谷に下っても同じことであつた。山に入れば昂然たる自然が常にあり、大自然の偉大な姿には畏敬の念が湧いてならなかった。そう思うことが人間ではないのか、と、氏は思った。

文明の存在を意識し、物質文明をみる時、技術が必要であり文明を求めるための技術が不可欠なのは確かである。然し技術を駆使することによって自然を痛めないかと考えもするが、自然の法則に恵まれながら人間生活をし、これを両立させるものはあるのだ、という。

自然の法則を求めるための手近かな場所は山だ。そこに求める山がある。複雑な、そして広大な自然尊敬の念を導き出す山がある。など、山を通してのものの考え方、技術を通しての人類の繁栄と人生の進路など五十五分間にわたって熱弁をふるわれた。聴衆は非常な感銘を受け一人として無駄口をいう者もなく終了。

続いて、『白き魔の山』が上映され、日本人として初登頂を成し遂げた富山岳連隊のナンガバルバート登頂のシーンが昨日の如く思い出された。夕刻せまる雨の中をバスに分乗、馬場島に向う。会員の先輩達が歩いた路も舗装され、ガスの中に

ころは、山頂周辺に小屋はなかった。一九二八年の一橋山岳部報「針葉樹」第四号で、雲取小屋(甲州)と基助小屋が確認できる。これはちょうど武州雲取小屋工事の六月下旬の記録である。

ところで武州雲取小屋工事の概況であるが、秩父鉄道(株)(以下秩鉄と略記する)が新設をきめたのが一九二八年六月であり、秩父営林署(以下署と略記する)と協議して、小屋敷賃付願(一二坪二三九・六㎡)と小屋用材私下代金が処理された。小屋敷賃用材は四年九カ月間で九十五銭である。建設目的は同社保存文書によると、「奥秩父登山者近年増加シ来り候ニ付テハ登山者ノ為当社ニ於テ休泊小屋ヲ建設致度候」とある。その主務者は、旅客課主任の吉田卯吉(浩堂)さんで、のちに塚本間治、町田立穂両氏とのトリオで、奥秩父の紹介につとめた地元先覚者である。

工事は秩父郡大滝村大字大滝字大血川の山中宗太郎さんが請負い、秩鉄の記録によれば建設費百八十一円九十五銭とある。当時十八歳の最年少者で工事に参加した山中信義さんが健在であると、前村長山中敬二、村史編纂委員黒沢八郎さんたちから教えられたので、本年六月三日黒沢家でご当人にお目にかかった。その話によると、工事参加者は山中宗太郎のもとに、山中喜好、山中馬吉、岩田

雄吉(木挽)、山中正一、山中信義の計六名で、いずれも大血川の住民である。当時秩父側からの雲取山最短コースは、大血川→大日向→お経平(お清平)→白岩山→雲取である。なお工事中は署の大滝村落合の駐在員雨宮静さんが、起居をともにしたという。

この信義さんの記憶によると、小屋一棟と便所ができたという。小屋は間口二・五間、奥行四間で、屋根は平トタン葺き。柱は樅で、壁は唐檜丸太の横積み、窓は片側に二つずつで三尺四角のもの。内部には両側に床があり、薄縁が敷かれ、中央は土間だった。しかし現地の林相から考えると唐檜は少いので、柱に唐檜、壁には白檜の丸太が使われたろう、という意見もでた。

工事は梅雨期で、約四〇日かかったが、まず TENT 泊りでとりかかり、トタン屋根ができてからは屋根下泊りとなった。とにかく雨で苦労された由である。なお山中宗太郎さんは、地元でいろいろ工事などをうけ、建具などに器用だったという。

そこで私は、武州雲取小屋の登山者使用開始を、夏休みのはじまる七月下旬、おそくとも八月上旬と推定した。もちろん管理者不在で、使用料金は小屋内においた缶に投入した由だが、あの頃の登山者はマナーがよくてそれが守られていたと、黒沢八郎さんは語っ

80周年記念行事(富山)

姿を消していた勿岳も、岩魚の刺身や山菜の料理にビールを傾けながら会員親睦の最中、ガスの切れ間に南面を見るような姿で浮かび出た。仙境にして初めて見ることのできるその情景は私達を祝福して呉れているようだった。

講師の西堀栄三郎氏、会長の今西寿雄氏、副会長の山田二郎、大塚博美の両氏をはじめ五十人近い会員のかたは夜の深まるにつれ熱が入り、昔話し、今話し、寝話し、静寂な環境での久々にして動的な語りであった。

明くれば中山山の予定であったが残念にも降雨、中山行きを次の機会にゆずれ解散。

参加者芳名(記入順) 今西寿雄、西堀栄三郎、中田清兵衛、若林啓之助、増江俊三、石坂久忠、

佐伯久雄、木戸繁良、大場振雄、木南金太郎、浜田文二、藤条好夫、小林雄次郎、津田文夫、福久米之助、中川博人、岡本明男、太田義一、広瀬正、安土武夫、稲垣保彦、青木俊輔、酒井義次、水井謹作、山田二郎、高遠宏、大塚博美、関塚貞亨、神崎忠男、氷見定三、本多啓七、野島福三郎、前田庄一郎、小杉喜良、三鍋久雄、堀口圭介、井上晃、山本春雄、池田則章、井上和正、谷川幸子、上野博基、小倉正一、大角隆、山岸邦子、長津葛尾、水腰英隆、森丘実、中塚悦子、小林浩一、佐伯尚幸、鈴木郭之 他に一般参加者二百五十名

(石坂久忠)

80周年記念行事(富山)

／てくれた。私は三年ほどまえに、中央アルプスの越百小屋でこれと同じ経験をしたので、なんともなつかしく感じ入った。

秩鉄と前後して秩父管林署長の宮田さんも、奥秩父登山者の増加に注目し、奥秩父管内の対策を考えていたようである。署保存文書の有無は不明だが、秩鉄保存文書に署との交渉内容を語る資料がある。それによると署は管内の奥秩父に、山小屋三カ所と指導標百カ所、登山地図五千部作製等の案をもっていた。山小屋一カ所は武州雲取小屋となるが、他の二カ所に

／丹水会夜話・6月15日・ロッジ「峠」にて

丹沢回顧(上)

塔ノ岳の尊仏

石川治郎

丹沢の紀行文として古いのは、高野鷹蔵、武田久吉の二人が塔ノ岳へ登ったときの文章でしよ

正測図に、正式に載った登山小屋であり、数年後さらに一棟増設された。

山小屋ができたが無人小屋である。翌々年の五月には、秩鉄の影森駅―三峰口駅が開通した。雲取登山も当然増加する。シーズンには小屋の管理人常住が求められる。ここで登場するのが秩父市蒔

東西南北

ビールパーティの夜

今井喜美子

九月七日(土)は婦人懇談会主催のビールパーティの日でした。

九月ともなれば涼風もたつかと思いましたが、なかなか暑くてビールパーティむきの日でした。昔はよく出席したものでしたが最近はずつかり無沙汰していました。婦人懇談会委員会よりお沙汰があつて、去年から老いも若きも順番に当番を割り当てることになった。今年は私の番になっているとのこと、喜んでお引受けしました。私に与えられた仕事は、枝豆をゆでて持参することでした。いつもの大量なので調子が狂って、一寸ゆですぎでしたがリニックに入れて背負ってゆきました。ルームは六、七十人の方でいっぱいになりました。

婦人懇談会の方々の心のこもったおつまみは美事なもので、色とりどりの女らしさがあふれていま

田生れの富田治三郎青年で、のちに「カマ仙」とか「鎌仙」という呼称で、山仲間にしられた人である。一九四二年(昭和十七)発行の塚本閑治著「奥秩父」一〇五頁には、町田立穂さんが彼は「殆ど一年を通じて住んでいる」と述べている。(以下次号)

した。

一同遠慮なく食べて飲んで、たのしい雰囲気でした。前会長の佐々様、渡辺兵力様、関根様、などお近くの席でしたので、ご気嫌でいろいろお話し合えました。とかく窮屈に思われがちな山岳会の集りも、こんな形でなごやかになるのもよいことだと思いました。お酒のよさはそこにあるのではないのでしょうか。冬は地酒パーティでも催したいかがですか。

△参加者六十八名▽

第一五九回 水会

九月十八日 ルームにて

今回はちょっと趣向を変えて、馬酔木同人、小林碧郎氏による「山の歳時記」の講演である。

何せ天狗の多い三水会のこと、さぞ華やかな談話になるかと思われたが、蘊蓄を傾けての講師の迫力に押されてか、以外に静聴裡に予定の二時間は終了した。

民族の魂の文化ともいうべき俳

丹沢回顧 (上)

う。明治三十八年、一行八名が玄倉から山神峠を越え、簗杉沢を経て登っています。これが尊仏詣り(塔ノ岳登山)の参道でした。高野さんのは「山岳」第一年第一号に、武田さんのは「明治の山旅」の中におさめられています。

さらに古いところでは、岡野金次郎が十八歳のとき、大倉から塔ノ岳へ登っています。母方の里が西秦野村の堀西というところだったので、そこへ遊びにきたときに塔ノ岳登山をして「山つてこんなきれいなものか」と感激した。それが徴兵検査で小島島水と初めて知りあって、明治二十八年春、岡野が誘って二人で塔ノ岳に登り、さらに友情を深め、感激を新たにしております。(このことは「山岳」四四年一号「小島島水追憶」号に、岡野の「小島と私」の寄稿がある)

大倉登山口から塔ノ岳に向かって約四十分ほど登ると、一本松という指導標のある場所に着きますが、いまは一本松はない。矮小な松はたくさん生えているが、五十年前、私が歩いたときは立枯れの大きな一本松がありました。初期の「山と溪谷」丹沢号に、いきいきした松の太木写真が載っています。当時、一本松でなく二本松だったことが、その写真でわかります。尾根のところが、ほかに大きな木のないところですから、月明りに登っていくと、下からの良い目標になったものでした。

塔ノ岳では、毎年五月十五日に尊仏さんのお祭りがありました。その日は地元の百姓連中が、爺さん、婆さん、子どもにいたるまで、揃って塔ノ岳へ登るんです。昭和十一年五月発行の雑誌「山」に、飯塚さんという人の「丹沢山の五・一五」という随筆が載っています。それによると、その日は尾根筋のいたるところに賭場がひらかれ、博打ちをやっている。この日ばかりは警察もお目こぼしです。それこそ関東一円から賭博師が集まっ

くるから、村の人たちが登って行って「なぐさみ」をやっても、みんなとられてしまっています。

私たちが縦走して最後の塔ノ岳で、これにぶつかったことがありました。「兄さん、遊んでいいかい」と声がかかって、「よし、本職を敗かしてやる」なんて意気こんでみても、結局はみんなとられてしまった。また、足の弱い人たちにはそれに合うように、頂上へはまだ低いところに御開帳場があったものだ。足の強い人はもっと上でとられる。いちばん達者なのが頂上まで行つてまきあげられるという仕掛け。ちょうどこの季節は、秦野平野が一望、レンゲ草の赤紫色と麦の黄色で彩られ、いまと違つてのどかな丹沢の五・一五でした。

それというのも、塔ノ岳に尊仏さんがあったからです。尊仏さんというのは、頂上北寄り、縦走路から左六十メートル下った小尾根に露出した大きな自然石の仏さんだったそうです。関東大震災で簗杉沢側的小金沢に落ちてしまい、いまはありません。霧の旅会の松井幹雄さんの撮った写真が、尊仏さんのありし姿を伝える唯一のもので

す。戦前の五万分の一地形図には尊仏の露岩が表示されていましたが、現在のには無論ありません。



丹沢の小屋「峠」
カット／鈴木正俊

塔ノ岳を尊仏山と呼び、いまも小屋の一つを尊仏小屋というの

は、こんな

いわけから

です。

(以下次号)

丹沢回顧 (上)

句の一端に触れた清涼一服の夕べであった。

過日の黄河流流踏査隊に参加された折の小林講師の一句、

「地平まで黄土高原麥熟る」

〔参加人員二十一名〕

(木村俊郎)

八幡平への旅

小田 正男

八幡平は、十数年来の憧れの地でした。八月上旬教え子と共に四泊五日の予定で出かけました。初めて見る岩手山の偉観には思わず絶叫せずにはいられません。藤七温泉に投宿し朝霧の中を散策しながら秀峯岩手山にみとれました。快晴に恵まれ見返峠からの山々の遠望はすばらしく、八幡沼水辺のお花畑にも満きつしました。明けて大沼ロッジ泊で焼山に登り玉川温泉に下り、三日目を後生掛温泉にして陸奥旅を終えました。

陸奥の山を越えつつ 見わたせば 岩手の山は いやはるか

なり (高原のバスにて)

藤七の 出湯はたのし 去りが

たく行くは悲しや 心のこりて

(藤七温泉)

花と氷河の旅

坂倉登喜子

花と氷河の旅も今年で九回目と

なった。今夏のヨーロッパアルプスは、八月上旬降雪があつて、天候が悪く、マッターホルンの登山者が、上のソルヴェイ小屋に二十名くらい泊つたまま、下山できなかったというのを、ツエルマットの郵便局の支局長でもある、スイス山岳会支部長のウィリー氏から聞いた。

その時に、十二月の日航機墜落事故の報道のことも知らされ、私達一行は帰りの飛行機を凄く心配した。

旅行中の八月七日、十八日まで、快晴に終始恵まれて、シャモニ、ツエルマット、グリンデルワルト、ミューレンと毎日歩き続け、エーデルワイスも新しい場所

で二カ所見つけることができた。

好きな人達は大感激だった。

ツエルマットでは、ホテルにスイス山岳支部長のウィリー氏をお招きして夕食後、氏のご好意で山岳博物館を訪ねた。毎年拝観させていたでいるが、内容が豊富

で有名登山家の資料が多く、日本にもこのくらい山岳博物館ができた素晴しい。何時も思うことだった。

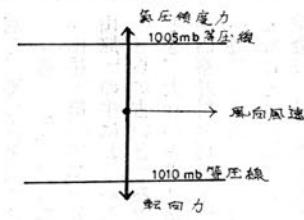
私は他にベルンとシャモニで山岳博物館を見たが、日本でも完璧な山の宝物の器を作りたいものだ。

今年は参加者中に夫婦組は四組で、新婚旅行を兼ねた二十歳代のカップルや、最年長の七十一歳の

JAC会員のK氏も終始お元気に
若いメンバーと共に健脚のA班と
一緒に歩かれて、さすが平素のト
レーニングのためかと、皆が驚く

山の気象と気象学(8)

六月十三日(木)午後六時半より、日本山岳会
ムにて、前回に引続き、スライドによる雲の見方
と地衡風(教科書五章)について学んだ。



雲の見方 変種1 レンズ雲 層流が山を越える
時に山岳波を生じ、その山の部分だけで凝結が起
り、レンズ雲となる。風上で発生、風下で消滅
し、全体としての位置は動かない、横から見ると
レンズの形で、下から見ると翼形をしている。こ
の変化は新幹線が関ヶ原を通る時に見易い。変形
重力からシア不安定係数を減じたものScをスコラ
ナンバーと呼び、このScが正の値を示す層だけに
レンズ雲が発生する。レンズ雲は風が強い時に発
生するから、上層の谷の前面と後面で発生し、こ
の理屈からいえば、天気は悪くなる時と、良くな
る時が半々でなければならない。

地衡風 大気の運動である風は一寸考えると大気
圧力の高いところから低い方に向かって吹くよう
に思われるが、地球上の人間から見るとそうはな
らない。それはわれわれが、自転している地球上
から風の方向をみるから
である。風の原動力は場
所による気圧の差(気圧
傾度力という)によるの
だが、地球上からみた風
の方向は地球の自転方向
と逆方向に、見かけの力
(転向力またはコリオリ
の力)をうけていること
になる。メリーゴーラウ

ほどだった。
最終日のチューリヒのホテルで
のお別れパーティでは、歌の指導
に熱心なI嬢指揮の合唱で盛り上

り、ファイナルとなった。
永いと思っていた十二日間もま
たたく間に過ぎ全員無事に帰途に
つき、心配した帰りの飛行機も無

ンド上から回転面に水平方向に矢を放った場合、
矢は放った方向から飛んでいくように見え
るはずである。気圧傾度力と転向力とはちょうど
大きさが等しく方向が逆になることが証明できる
(図参照、証明は教科書にある)。

それで風の方向は等圧線に平行で、北半球では
高圧側を右にみる方向になる。これが地衡風であ
る。地衡風の風速は気圧傾度力に比例し、緯度の
正弦に反比例する。すなわち等圧線が混んでいれ
ば気圧傾度力は大きく、風は強くなる。また気圧
傾度力が同じ場合、緯度の低いところほど風は強
くなる。

地衡風は地上から千メートル以上のところで吹
いているが、地表近くでは地表との摩擦のため
ずっと弱くなる。この場合は摩擦風と呼ぶ。富士
山、岩手山などの山頂測候所で観測される風はほ
ぼ地衡風といえる。

一方山腹や稜線では風は一般に地衡風より強く
なる。これは山の障害のためである。ビルの谷間
で強い風が吹くことや、川の流れば川幅の狭いところ
で急なものと同じように考えられよう。富士山山
腹、前穂尾根、北岳などで強風による遭難が生
ずるのはこのためであろう。

なお以上地衡風のことから、天気図を書く場
合、風の矢羽根の側を低圧部とし、等圧線は風に
平行に引くことが大切である(もちろん別の要因
で常に完全に平行になるとは限らない)。(大井正
一氏講義要項 高橋がまとめ)
気象講座は九月十二日(第十回)で一応終了す
る。

△参加者十四名▽

科学研究委員会 (高橋詢)

報告

秋のかぬか平例会

岩手支部

九月十四日、玉山村、相ノ山、
大森山を雨の中を登る。岩泉町安
家から旅館泊り。黄河源流トレッ
キング報告、鹿野松男、関口安、
チベットの学術報告、松田和弘。地
元の竜泉洞の地底の名水で乾杯。
九月十五日、薄晴、北上山地石
灰岩特有の直径百メートル余のド
リーネを見学、石峠から、建設中
の林道を安全峠まで車で入る。草
地造成を経て、寒冷地現象の階
状土、かぬか坊主、かぬか輪等を
観察しながら山頂へ、三等三角
点、古い馬頭尊の小祠あり。当日
は敬老の日。最年長の遠来の常
連、望月達夫、阿部国雄氏への
感謝の胴上げのあと下る。さらに
一等三角点の黒森山のハシゴ。竜
泉洞を経由し、小川の瀬戸屋泊
り。ちょうど秋の八幡神社の祭礼
で山車も賑やか。

九月十六日、曇、早坂峠、石峠
より浦志内支線林道をウエノオー
ジ沢の近くから尾根通しに藪をこ
ぎ七兵衛頭の頂上へ。三角点は腐
葉土のため発見出来ず。かつて、
近くの一等三角点、三沢ノ頭で今
西錦司氏とさんざん探し廻って

事成田に着陸、拍手で無事を喜び
合い、関西へ帰るメンバーを送っ
て、別れを惜しみつつ解散した。

そのあと確認したことを思い出
す。帰途、岩洞湖畔の岡本商店に
て直会。
参加者 望月達夫、阿部国雄、石
村実、石村夫人、田鎖寿、小口洋
右、菊地修身、近藤有慶、鹿野松
男、和田庄司、関口安、柳田房
男、松田和弘、立花幹雄、長村
仁、山崎誠一、佐藤紀子、佐藤敏
彦 (佐藤敏彦)

蝦夷お月見会

北海道支部

北海道支部の『お月見の会』は
回を重ね十四回となった。今年は
九月二十八日、後方羊蹄山麓の真
狩村山荘を観月会処とした。
北海道と南西諸島を除く各地
は、曇り、または雨の空模様であ
る。

山荘は橋本支部長の山荘で、
佐々前会長夫妻を始め、三組のペ
アに老若男女十四名、合計二十名
が集う。アイビーが、満酒な建物
に映えた前庭に勢揃いした。

午後六時、兼平副支部長の開会
宣言、橋本支部長と佐々前会長の
挨拶で始まった。提燈に灯を点し
焼鳥の旗が木の枝に下げられ、炭
火の本格的焼鳥に、スコッチ、銘
酒、焼酎、ビールの栓が順次開い
ていく。木の間より、晴れ上がつ
た夜空に待望の月が上る。

山荘の窓辺にはススキが生けら
れ、お月見団子と饅頭を供えてあ
る。月見の宴を一時中断し、山岳

会創立八十周年記念晩餐会(椿山荘)で上映されたトライビジョン・スライド『山を讃え山を究める』がスタジオに鮮やかに映し出され、出席の会員から、素晴らしい、これだけでも大変価値ある集会であった、と絶讃を博した。

続いて、味自慢おでん、真狩産の咬嚼吧薯、それに取立ての茸がまた美味しい。

話題は創立八十周年の暑寒別山行、北方圏センターの札幌晩餐会とシンポジウムを肴に、大いに呑み、食い、歌い、騒ぐ。

翌朝は月見鯉鮓、イクラ鯉鮓のメニューである。このイクラは、佐々木会員の厚意によるもので、食通の会員も、唸るばかりであった。支部の行事も、会員皆で創り上げる意欲に、支部長、支部委員一同感謝の気持で一杯の朝であった。

酒類の数二十、ビールの空瓶林立しながらも、昨夜は何も飲まない、何も食べない、

と言う輩も出る始末。

山荘の庭の芝生に座り込み、迎え酒をする者、トマトを嚼る者、きのこ狩など思い思いに過ごし、羊蹄の湧水を容器に詰め帰途についた。

出席者・順不同 河村章人、河村皆子、河村耕平、橋本誠二、柳田凉子、平野明、亀井秀子、三浦勝幸、石井忠雅、石井笑美子、久保田優一、兼平治水、井後幸太郎、川越昭夫、佐々木善民、佐々保雄、佐々喜久恵、森下雅幸、中西

図書紹介



関東白山

浅野孝一、打田鉄一
楠目高明、横山厚夫 著

本書は関東地方の山を百、選んだものである。白山と名づけた書物の中には『きふ白山』(岐阜県山岳連盟編)のように、一山毎に地図と写真を付し、案内、本文、それに県下の地質、地形、気象、動植物など記した

庸夫、船場俊己

八十周年記念事業第二次募金応募者ご芳名

(昭和六十年十月二十三日まで、敬称略、順不同)

(平野明)

(二口) 浅野孝一 奥津五郎 中村一男 辻 莊一 (一口) 今福克保 山中三男 泉 亮 松浦祥次郎 鈴木岐侑 佐藤はまゑ 応募会員数累計 一七八七名 応募口数累計 四二八二・七口 金額累計二一、四一三、七三三円

※お願い 申込金払込み最終期日が過ぎましたので、お申込みいただいたまま未送金の方は至急お願い申し上げます。ご不明の場合は事務局にお問合せ下さい。
電話 03 261 4433

ものもあるが、本書はそのような大がかりなものでなく、百の山に關しての随想的紀行とも呼ぶべきものである。

山の選び方も、あまり知られない山や登り難い山を避けて、むしろ多くの人に登られ親しまれている山に重点を置いているように思える。本書の中では平ヶ岳、錫ヶ岳、白砂山、和名倉山が一応奥深い山と言え、他は殆んど楽な山である。これは関東だけで白山という条件から見ても、やむを得ないが、例えば谷川岳から上越国境尾根を辿って尾瀬に到る間に、平ヶ岳だけというのはいや淋しくはないだろうか。

本書の山は道があり登りやすい山だけに、執筆者はのびのびと書くことが出来、読む側も自分の登った山が多いだけに親しみを帯

るのだが、同時に、執筆者が折角苦心した場面をあっさり読み流してしまふこともある。ともかく各地の国誌、郡村誌、風土記稿や万葉集を引用してのそれぞれの文に執筆者の意図が感じられる。

巻末に「おわりに」の一文があり、山の選定のいきさつ、ガイドブックではないから詳細な地図記録を入れなかったことが断わっている。読了して思ったことは、一つくらいスキーの山があれば変化が持てたろう、ということと、筑波山や大山が載っているから、三峰山も、ということであった。

一九八五年 実業の日本社刊
三一〇ページ 写真十六葉
一、八〇〇円

(川崎精雄)

・会務報告

九月理事会

9月11日

午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大

塚副会長、嶋原、橋本、

大橋、松永、浜口、梅

野、高遠、鈴木、新

井、太田、大森、長谷

川、絹川、岡沢、関塚

各理事、松田、中村、

宮下各評議員

委任 山田副会長、平

井理事、竹田、金坂各

監事

審議事項 なし

報告事項

○80周年記念式典、記

念晩餐会について

○関西支部50周年記念

晩餐会の件

○会員名簿発行の件

○各委員会報告

80周年関係記事で会

報増頁、そのため多少

予算超過する。

山研十一月四日閉

所。

自然保護の会報用標

語を募集、

アメリカ山岳会より

交換登山として、六名

来日、10月15日より27

日まで滞在、小川山他へ登山（ロ
ッククライミング）、講演会、歓迎
会等を予定。
80周年記念事業としての中国登
山およびトレッキング報告、行事
の会員絵画写真展、記念展報告。



☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●忘年会

日時 12月14日（土）18時30分よ
り

場所 山岳会ルーム
会費 二、〇〇〇円

福引があります。

主催 婦人懇談会と集会委員会の
共催

●高所登山における

アルパイン・スタイルの
問題について

一八九八五年間西カラコルム登
山隊のマッシュブルム、プロ
ード・ビーク連続登山の場合

日時 11月27日（水）18時開会

場所 日本山岳会ルーム

講師 重広恒夫氏、賀集信氏（未
定）

●ルーム誌

九月

2日（月） 総務委
5日（木） 図書委
7日（土） 婦人懇談会ビブー

11日（水） ティ
12日（木） 理事会
13日（金） 科研委、気象の話
17日（火） 海外委
24日（火） 自然保護委、図書委

25日（水） 総務委
26日（木） フィルム委
今月の来室者386名
会員異動
物故

3428 塩田 良伸（8・25）
8221 村嶋 雅博（8・）
8801 山崎 克（8・2）
9409 田村豊三郎（9・3）
8221 村嶋 雅博（8・）
姓名変更
9442 根岸 悦子→大谷へ
除籍取消
7414 福島 繁雄

午後1時半～5時
懇親会 午後5時半～7時半
場所 中野サンプラザ集会室8F
（中野駅北口前）
会費 シンボジウム 千円（予稿
集）、懇親会 五千元
主催 （社）日本山岳会
（社）日本ネパール協会
講師 川喜田二郎 中尾佐助 沼
田真 佐々保雄 渡辺兵力 渡
辺桂
※なお、懇親会出席希望者は前号
会報のお知らせを見て下さい。
科学研究委員会
自然保護委員会

●現地小集会

一、石老山（六九四メートル）
12月22日 相模湖駅に9時集合
・誰でも楽しんで登れるのびやか
な山。道志の山の眺めが良い。
・ルート 相模湖駅→石老山入口
→頭鏡寺→石老山→大明神→崖坂
→相模湖駅
・歩行時間 三時間 上野原（五
万図）
二、独結山（二二六メートル）
2月2日（日）信越線上田駅に

10時集合
・ビックルとアイゼンの必要な急
峻な山。日本離れた風景、山麓
は信州鎌倉といわれるほど古い神
社、寺が多い所。
・ルート 上田駅→中禅寺→不動
独→独結山→中禅寺→上田
・歩行時間 四～五時間
三、愛鷹山
3月8日～9日、8日の夕方十
里木に集合。
・ルート 十里木→越前岳→呼子
岳→位牌岳→愛鷹山→柳沢沼津
以上参加希望者は事務局までご
連絡を、案内状をお送りします。
集会委員会

●スキー懇親会

日時 昭和61年1月11日（土）10
時～12日（日）正午まで
場所 柞池高原スキー場
集合解散 現地
会費 一泊二食 六、〇〇〇円
・参加希望の方は12月上旬までに
事務局までご連絡を、案内状をお
送ります。
集会委員会

編集後記 この編集後記用の欄は
常に確保して割り付けをしな
発行日近くなって飛び込んでくる
原稿（特にお知らせ関係）を捌き
きれない、と会報の元編集代表の
大森久雄氏から言われ、それ以来
これを守ってきましたが、お陰で
何回もこういった原稿を上手に捌
くことができました。
会計の原則の中に継続性の原則
というのがありますが、こういう
ことを言うのではないかと思いま
した。活字の組み替えなどが重
なると余分な経費も重なるわけだ
から。逆にこの原則を守らないと
いつも貧乏ということか？（〇）
昭和六十一年十一月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイム四番町
発行所 法人 日本山岳会
発行者 今 西 寿 雄
編集代表 岡 沢 祐 吉
電話東京（郊）四四三三
振替口座 東京三三二四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所 株式会社 技報堂